

P1-068

就園前児の親子グループに参加した親子  
遊びの変化について

塩澤 悦子、神田 聡、館花 佳奈子、上田 敏宏、  
松原 千瑛、中村 由紀子

島田療育センターはちおうじ リハビリテーション科

【目的】

当センターでは、発達障害が疑われる2～3歳児とその保護者を対象に、保育士、心理士、作業療法士が関わりながら、親子で楽しく遊ぶ、子供の理解を深めることを目的とした親子グループ活動を家庭でできる遊びを中心に実施している。グループ活動の改善を図るため、現在の活動内容が日常生活での遊びや保護者の認識に与える影響を検討した。

【方法】

当センター発達総合外来を受診し、発達障害が疑われる2～3歳とその保護者で親子グループに全10回参加した親子にアンケートを配布して、うち初回時と終了時の2回回収できた8家族を対象に、普段の家庭での遊び（10種）を行う頻度、遊びの始め方、その時の親の満足度について4段階の中から回答してもらい、グループ開始前後の比較による変化を調査した。また、グループ終了後には活動内容に関する感想とグループ内活動を普段の遊びで行ったかについてアンケートを実施した。

【結果】

10種の遊びのうち3種〔おもちゃ〕、〔からだ遊び〕、〔本〕は、遊びの頻度が増えた。また遊びの始まり方をみると、〔おもちゃ〕と〔からだ遊び〕は未実施や一人遊びが開始前には多かったが終了時には他者と始めることが増え、〔本〕は未実施・誘導が減り、自発遊びに変化がみられた。親の満足度はいずれも「楽しい」の増加がみられた。

終了後アンケートの自由記述を見ると、対人注目や関わりが増えた、新規場面に慣れた、言葉が増えたといった子供の成長についての記述が多かった。グループ内で実施した〔からだ遊び〕を子供が家庭で要求した、スタッフの関わり方、遊び方が参考になったという意見もあった。

【考察】

アンケート結果から遊びの変化が見られた遊び3種はグループ内で毎回行っている活動であり日頃家庭内で行うことができる遊びでもある。これらは声掛けと共に触圧刺激や固有感覚刺激を与え子供の反応を見ながら関わる遊びでもあり、個々の子供の特性、発達段階に合わせた遊びを提供したことによって、対人意識の発達や遊びの成功体験を親子ともに得ることができ、その結果親子の関わり遊びが増したと推測される。今後グループ内での取り組みとして個人の特性と発達段階をみながら、親子間での対人注目、向上を促すような遊びを取り入れていく必要があると思われる。

P1-069

発達障がい児にかかわる看護師のことば  
かけの分析—オノマトペを用いたツール  
開発に向けて—

石館 美弥子<sup>1</sup>、加藤 千明<sup>2</sup>

<sup>1</sup>帝京大学 医療技術学部 看護学科

<sup>2</sup>一宮研伸大学 看護学部

【目的】

医療現場では発達障がい児の不応行動が頻りにみられる。慣れない環境に順応することが難しい発達障がい児にとって、医療機関の受診は容易ではない。定型発達児を対象とした研究では、オノマトペを用いた説明の有効性が検証されている。本研究の目的は、発達障がい児にかかわる看護師が使用するオノマトペの表出実態を調査し、発達障がい児の受診行動を支援するツールを検討するための資料を得ることである。

【研究方法】

参加者：障害児医療療育施設に勤務する、発達障がい児への対応経験が5年以上ある看護師10名を対象とした。方法：半構成的面接法を実施した。医療処置を受ける発達障害の疑いを指摘された幼児期後期の絵をタブレット端末に設定し視覚刺激とした。看護師には端末に映し出されたイラストの幼児に向かって医療処置を説明するよう教示した。面接内容はICレコーダーに録音した。分析：逐語録に起こし、看護師の発話データを抽出した。データは、Text Mining Studio Ver6.2を使用し解析した。倫理的配慮：研究者の所属機関の倫理委員会の承認（帝倫18-060号）を得て実施した。

【結果および考察】

内容語の延べ単語数は4,484語で、単語種別数は873語であり、タイプ・トークン比は0.194であった。これは、定型発達児を対象とした先行研究（0.213）に比し低値であった。タイプ・トークン比は延べ単語数に対する単語種別数の比率を求めたものであり、単語種別数が多いとタイプ・トークン比が高く、使われた単語の数が多く、話が豊富と解釈できる。今回、発達障がい児への看護師の説明は定型発達児への説明より、提供する情報量は少なかった。過剰な情報量で混乱しやすい発達障がい児の特性が指摘されていることから、子どもの情報処理能力に応じた言語的対応ではないかと考えられる。抽出されたオノマトペの上位20件をみると、定型発達児と共通するオノマトペが10語認められ、その活用可能性が示唆された。発達障がい児への支援では、視覚支援の有効性が示されている。今後、視覚媒体と繁用性の高いオノマトペを融合したツールの検討が求められる。

本研究はJSPS科研費JP17K01803の助成を受けたものです。